

主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力の育成に関する考察

Observations on fostering art appreciation and evaluation abilities based upon thematic expression method

立原慶一

本発表は表現と鑑賞の相互スパイラル運動的效果を念頭においた方法論によって、一連の題材実践を行いその結果を考察する。さらに題材の時間経過的配列としてのカリキュラム効果をにらみつつ、鑑賞及び評価能力向上のメカニズムを究明し、今後の教育実践に生かしていこうと思う。制作内容・過程をめぐって、理論的な反省がなされ、今後における作品の、より良き改善策としての美術的理想が、自らの主題表現に伴って、提示されるならば、作品一般に対する鑑賞及び評価能力を、高められるのではないだろうか。こうした表現と鑑賞の相互作用的效果を課題とし、それから本発表は出発する。

研究方法としては第一に、高学年児童が行った、自作品鑑賞行為の分析結果を、基軸に据える。その特徴の類型化を踏まえるとともに、芸術学的に熟慮することで、美術的洞察を促進させる観点となるような、質問項目が考案・設定される。第二に、第一段階の操作でつくられた質問紙による、自作品の鑑賞体験が当該能力の育成にとって効果的である、との方法論的仮説が、教育学部学生や現職教員を対象に、実践を積み重ねることで検証される。第三に、方法論的仮説にフィードバックして、その有効性をさらに高めるべく、各質問項目を部分的に修正し、その一部が追加される。第四としては翻って、それが児童・生徒の当該領域における、力量を育成するための、教育プログラムを睨んだ実践的方法論として成熟することを目論んで、小・中学校で実践される。

以上が研究全体の趣旨である。ただし本発表は通信教育部学生に対して実践し、その結果を対象とするため、第二及び第三ステージの研究として位置づけられる。

鑑賞及び評価能力に関して、質問事項に対する回答内容をにらみながら評価基準を分節化して複数設定する。それを改めてその枠組みに位置づけてみることにする。それによって基準の妥当性が吟味されるとともに、彼らにおける能力の現状と特徴、さらには次なる教育課題を明確にしてみたいと思う。

今回、方法論的仮説が、認定講習の小学校現職教員 32 名に対して実践されることで、その有効性が確かめられよう。それは様態の異なる三課題が連続的に課される事例となる。鑑賞される作品は「自分たちの作品」が主な対象となるが、第一の題材実践として「ねぶたの下絵」が、地域の特性と親しみやすさを勘案して、それに近似した作品として特別に鑑賞教育の端緒とされる。そこではとくにモチーフ・情景の選定と、性格づけのあり方に対する評価が、重点的に体験されることになる。

第二に「宮沢賢治作『やまなし』を絵にする～クレヨンを用いて～」の題材制作後に、自己の表現方法のあり方を効果的な主題表現、という観点から理論的に反省させる。また作品がより良くなるための、条件を提案するような、質問項目に対して答えさせる。

第三に宮沢賢治の物語「うろこ雲」を基にした学生作品 10 点から 3 点選ばせその根拠を尋ねる。さらには各自の評価基準を明示させる。本研究ではそれらの内容が、分析されることになる。

各質問項目では文章のテンプレートが、主題意識とその効果的な造形表現化のあり方との関係を突き止めさせ、表現効果を価値判断させるなど、教員の鑑賞及び評価力の育成に

とって有効に働いた。その研究成果から、質問項目の文言に以下のような部分的修正が試みられるならば、さらに方法論的仮説の実効性を高めることができると思われる。

それは<題材実践3>における質問項目 「そう感じた理由は表現方法のどこに求められるのか」に答えるに際して、「モチーフ・情景」「描写・彩色法」「構図法」「空間構成法」「描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらし、造形言語の活用法」の各専門用語を必ず用いる、という条件が設けられることである。それによって「全体的主題」そのものを直観的に把握するための切り口を付ける事態となろう。かくてその表現方法的根拠を突き止め、且つ言語化できる比率が高くなるに違いない。